

「応挙と金剛寺」年譜

西暦	和暦	年齢(数え)	応挙と金剛寺	その他の事項
1733年	享保18年	応挙1歳	5月1日、地元穴太の農業を営む父丸山藤左衛門と母(篠山藩士上田氏女との説あり)の次男として生まれる。幼名岩次郎。この前年は、害虫の大発生による大飢饉により、西国で餓死者一万二千人に及ぶ苦しい時代	
1738年	元文3年	〃 6歳	玉堂和尚により本堂庫裏再建	
1740年	元文5年	〃 8歳	この頃、金剛寺に小僧として入ったと考えられ、当寺の 住職玉堂和尚 より禅の基本(既成概念にとらわれず何事も自然体で物事を受け入れること)を教えられる。また、様々画家の画風や西洋の遠近法、写生などを取り入れこれまでの日本画には無かった斬新なものを生み出していく。飽くなき探究心、向上心は、応挙の生涯を通じて貫かれる。また、この後も良き理解者、協力者とも出会い大成していくこととなる	
1747年	延享4年	〃 15歳	師匠玉堂和尚寂、この後、京都に出るか	岩城という呉服屋に奉公、後に 玩具商尾張屋・中島勘兵衛 の世話になるという
1749年	寛延2年	〃 17歳		この頃、狩野派の画家石田幽汀の門に入り、本格的に絵の勉強を始める
1756年	宝暦6年	〃 24歳	父丸山藤左衛門没。以後何時か、父の年忌法要依頼の書簡が金剛寺に送られる	
1759年	宝暦9年	〃 27歳		この頃、眼鏡絵を描くという。「夏雲」「主水」の署名を用いる
1764年	宝暦14年	〃 32歳	第11次朝鮮通信使朴徳源来日、仙叟和尚と交流。後、和尚の為に金剛寺山門額「金剛窟」を筆し、日本に送るか	
1765年	明和2年	〃 33歳	この頃、小僧時代の思い出を基に玉堂和尚の肖像画を描くか。明和7年「人物正写惣本」(天理大学付属天理図書館蔵)と関連か	この頃、 円満院祐常門主 との親交はじまり、円満院時代始まる。「仙嶺」の使用始まる
1766年	明和3年	〃 34歳		この年、「応挙」と改名、「応挙之印」使用開始。息子応瑞誕生
1769年	明和6年	〃 37歳		円満院雪之間の襖絵を描く
1771年	明和8年	〃 39歳	金剛寺山門建立	「牡丹孔雀図」(萬野美術館蔵)を描く
1772年	安永元年	〃 40歳		この頃から、三井家との関係が始まるか。「大瀑布図」(萬野美術館蔵)を描く
1775年	安永4年	〃 43歳		「平安人物志」に画家部筆頭に記載、京都四条麩屋町西入町
1786年	天明6年	〃 54歳		冬の頃、国宝「雪松図屏風」(三井文庫蔵)を描くか
1788年	天明8年	〃 56歳	正月29日、天明の大火に遭い生まれ故郷の穴太に疎開。両親の追善供養と小僧時代の感謝を込め、短期間(約5ヶ月)に本堂の襖、壁面57面に「山水図」「波濤図」「群仙図」を寄進。本尊仏を視点とし、本堂全室(全面・全空間)をキャンパスと考え、非常に良く計算され描かれている。襖を取り除いた時の状況など、小僧時代に過ごした者でなければ到底理解出来ない配慮もあり、大火の疎開で一時帰ったという単純なことではなく、大成した応挙が「いつか故郷に錦を飾りたい」との想いで、以前から構想を練っていたのではないかと。又、平面から立面へ、写実に徹することで、ものの本質に迫ろうとするなど、依頼されて制作するのではなく、応挙自身が「本当に描きたい、やってみたい」との自由で新しい挑戦を全身全霊を傾けて行ったのではないかとと思われる	一門を率い香住大乘寺に赴き作品(165面)の製作に取り掛かる
1790年	寛政2年	〃 58歳		御所造営に際し一門を率いて障壁画を制作
1793年	寛政5年	〃 61歳		この頃より、老病、眼病により制作に支障をきたす
1795年	寛政7年	〃 63歳	7月17日没す。法名、円誉無三一妙居士	「松に孔雀図」(大乘寺蔵)、絶筆「保津川図」(個人蔵)を描く